

《Ⅰ. 研究報告》

助成年度 Grant Year	2023 年度
研究テーマ Research Title	限界集落における危機方言の継承と活性化－高齢者との協働を通して
研究代表者 Representative	谷ロジョイ
代表者所属機関 Organization	静岡理工科大学
職名・課程名 Position/Program	教授

①研究概要

研究の背景、目的・リサーチクエスチョン、学術的重要性、対象について記述してください。

【研究の背景】

静岡県北部山岳地帯の旧井川村（現・静岡市葵区井川）は、地理的条件から他地域との交流が長く隔絶された「言語の島」として知られる。中部地方では唯一の無アクセント地域であるなど、周辺の中部方言とは異なる言語的特徴を有している。本研究では、消滅の危機にある井川方言について、地域コミュニティの高齢者と協働で記録・保存・啓蒙活動を実施し、限界集落に暮らす高齢者の社会的孤立防止と活躍の場の創出を目指した。

現在の旧井川村の人口は300人足らずであり、うち子どもの数は、小学生3名、未就学児2名と極めて少なく、高齢化率は65%を超えている。この人口動態から、井川方言の将来的な継承は極めて困難であることが推測される。また、コミュニティの衰退により、集落の高齢者は社会的に孤立した状態に置かれている。

【研究の目的・リサーチクエスチョン】

本研究は以下の目的のもとに実施された。

(1) 消滅危機にある井川方言の記録・保存・継承

高齢の方言話者による自然談話を収集し、デジタル化された動画・音源としてインターネット上でアーカイブ化を行った。また、地域の高齢者と連携し、井川やその周辺地域の子どもたちが井川方言に親しめるような紙芝居を作成した。紙芝居では、平易な文章とイラストを用いて、井川方言の特徴をわかりやすく伝える工夫を施した。

(2) 限界集落の高齢者が社会的つながりの中で活躍できるコミュニティの実現

複数の集落において言語調査を実施し、井川方言の衰退状況を分析した。特に世代間の方言使用・理解度の差異に着目し、その結果を可視化することで地域住民と問題意識を共有した。

(3) 方言衰退の様相の可視化と地域住民との問題意識の共有

地域住民を対象としたワークショップ・シンポジウムを開催し、方言継承を実践する上での課題やその解決方法について議論を深めた。また、こうした活動は地域社会に広く発信された。

(4) 地域が利用可能なリソースとしての研究成果の還元

地域の高齢者らとともに「辞書を作る会」を立ち上げ、地域コミュニティが利用できるリソースとして、井川方言のオンライン辞書の整備を進めた。また、「井川昔語りの会」を発足し、冊子「井川の昔語り」を制作・配布した。

【学術的重要性】

地域方言とは、一人ひとりの文化的アイデンティティを示すと同時に、地域コミュニティの連帯を強化する重要なものである。本研究は、危機方言の保存という言語学的価値だけでなく、限界集落における高齢者の社会参加と生活の質向上という社会福祉的側面においても意義深い成果をもたらした。また、行政支援が乏しい地域言語の保全に対して、実践的なモデルケースを提示することができた。

【対象】

本研究の対象は、限界集落である旧井川村に暮らす高年齢層の方々である。高齢者との共同作

業により、方言使用の実態を探った上で、危機方言の記録・保存・教育・啓蒙といった活動を実施した。また、地域コミュニティの若年世代においても、方言の使用状況・理解度について検証し、方言衰退の実態を示す。調査にあたっては、申請者および研究協力者の研究室に所属する学生、院生らも同行し、方言調査の基礎を学ぶとともに、地域住民との交流を重ねることによって、多くの人的交流機会を設けた。

②研究の経過（研究課題１）

研究課題１について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題１：高齢者の活躍の場の創出

実施内容：① 自然談話のアーカイブ化：衰退の危機にある静岡市北部・井川方言について、高齢の方言話者による自然談話を収集し、動画・音源の記録・保存・公開を行なった。

② 印刷物の制作：これまでに地域コミュニティで構築した人的ネットワークを活用し、住人らが中心となる形で、内容、挿絵等を考案し、印刷物を制作した。具体的には、地域の高齢者とともに、井川に古くから伝わり、地域の人々に愛される民話「てしゃまんく」の児童向け紙芝居を制作した。制作した紙芝居は、静岡県内の図書館や子ども向けの読み聞かせ会などに配布された。

また、テレビ・新聞等のメディアでも報道され、高い評価を得た（以下、抜粋）

・深刻な危機にある井川方言－紙芝居で継承へ（静岡放送 LIVE しずおか 2024 年 5 月 16 日放送）

・「井川弁」残る話者は 80 代超 鉄路も影響するお国ことばの未来は（朝日新聞全国版 現場へ！ 2024 年 7 月 27 日掲載）

・貴重な「方言」を紙芝居に一過疎化進む地域を舞台に言語学者が作成（静岡放送 LIVE しずおか 2024 年 9 月 19 日放送）

・「ばしる」って？ 南アルプスの麓に伝わる方言守れ（朝日新聞全国版 連載「ひと」 2024 年 11 月 8 日掲載）

②研究の経過（研究課題２）

研究課題２について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題２：井川方言衰退の可視化

実施内容：旧井川村は、地理的条件から他地域との交流が長く断絶され、さらに、1950 年代の井川ダム建設により、異なる方言を使用する集団が大量に移り住んだため、周辺とは異なる方言が使用されている。このような井川方言を日常的に使用する高年齢層を対象に、言語使用の実態を明らかにするため、面接調査を実施した。また、若年世代における方言の使用状況、理解度についても検証し、データサイエンスの手法を用いて方言衰退の実態を可視化した。

本研究課題を遂行するため、井川方言について、複数の集落において実地調査を行なった。調査は ①個人面接調査、及び ②個人密着法を用いて実施し、井川方言の特徴について分析を行った。前者では、調査協力者が静止画や動画を描写する、単語や文を読み上げる、共通語を方言に言い換える、といった実験的な手法を用いた。後者では、年代、性別、方言使用といった観点か

ら選定された複数の協力者に機材等を貸与し、話者に日常生活の記録を依頼した。

②研究の経過（研究課題 3）

研究課題 3 について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題 3：地域への研究成果還元

実施内容：井川方言の継承や再活性化の重要性を伝えるため、ワークショップおよびシンポジウムを開催し、私たちにとって「最も身近な多様性」と言われる方言について地域住民と共に考える機会を設けた。ワークショップでは、井川方言の現状及び継承・再活性化について、方言話者である高齢の地域住民とともに検討する機会を設け、方言の再活性化を通じた活気ある地域づくりに貢献することができた。また、シンポジウムでは、地域の高齢者と協働し、県内の一般の方や中高生を対象に、パネル展示やクイズ・ゲームによって井川方言に関する基本的な知識が得られるような催しを実施した。

②研究の経過（研究課題 4）

研究課題 4 について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題 4：オンライン辞書の整備

実施内容：消滅の危機にある井川方言の記録・保存を目的とし、方言語彙および例文（音声つき）を収録したオンライン辞書の整備を進めた。地域コミュニティの高齢者と共に「井川方言の辞書を作る会」を立ち上げ、1974 年に発行された『井川村史』に収録された方言語彙から基礎語彙 600 語を選定する作業を行った上で、地域の歴史や文化を反映した例文（井川らしさが現れているような例文）を作成した。また、高齢者に語彙や例文の読み上げを依頼し、オンライン辞書に付する音声データを整備した。

プラットフォームは、カルリノ・サルバトーレ氏（大東文化大学）と下地理則氏（九州大学）が構築した「日琉諸語オンライン辞書 (<http://odjl.net/index.html>)」であり、新しい地点のデータとして井川方言を追加した。現在、公開に向け、作業を進行している。

③成果・期待される波及効果等

研究を実施して得られた成果および期待できる波及効果について記述してください。

本研究では、高齢者らと共に、方言継承・再活性化に取り組むことで、限界集落の高齢者が、人とのつながりの中で、生きる喜びをもって活躍できるようなコミュニティの実現を目指した。また、次世代への地域方言の継承を目的とした紙芝居の制作に取り組んだ。その際には、井川方言を母方言とする地域住民の方々（主に 80 代以上の話者）と問題意識を共有した上で、定期的に協議の場を設けることとした。研究を実施した結果、このような相互作用的な「プロセス」その

ものが、図らずも、個人の生活の質的向上に寄与していることが明らかとなった。

高齢者の社会的孤立は、心身の健康を損なう要因として、大きな社会問題となっている (Fujiwara et al. 2022)。こうした背景から、高齢者が、社会と接触・交流できるよう支援する試みは、さまざまな国や地域で行われている。例えば、イギリスには、「リンクワーカー」と呼ばれる職業があり、高齢者と地域活動をマッチングさせる役割を担っている。筆者が、地域住民と協働で行っている方言の継承活動も、高齢者の社会的交流やつながりを担保する場となっている。

方言調査という学術的営為において、高齢者は貴重な知識や経験を「与える側」として主体性を発揮する。Aked et al. (2008) は、高齢者が心身ともに健康であるためには、「与える (Give)」行為が重要であり、「与える」ことで自己価値や幸福感といった肯定的な感情が生まれると述べている。こうした観点からも、筆者の行った高齢者との共同作業は、一定の成果を上げたと言える。

一例として、「井川昔語りの会」の開催による生活の知恵や工夫、生業、古くから伝わる民話を共有し記録として残す活動、若年世代が井川方言に親しめるような絵本や紙芝居を制作するための協議の場の設置、そして「辞書を作る会」の立ち上げによる地域コミュニティが利用できるリソースとしての井川方言のオンライン辞書整備の準備などを進めた。

これまで調査地である旧井川村では、多くの言語学者が調査を行ってきたが、そのどれもが短期間・単発で調査地に滞在し、データ収集を行う fly-in-fly-out と呼ばれる調査であった。fly-in-fly-out とは、鉱山開発の際、近郊に町を建設するのではなく、都市部から労働者を飛行機で移送し、数週間ごとに勤務と休暇を繰り返す労働形態を指すが、転じて、単発の調査を表す語としても用いられている。Cochran et al. (2008, p.22) は、このようなアプローチについて著書の中で「研究者はまるで蚊のようだ。血を吸うだけ吸って去っていく」というアラスカ先住民のことばを引用し、批判している。また、Moje (2000) は、「研究者の役割として、知を産出するのみならず、研究協力者の方々の生活に肯定的な変化を与えるため、そして、協力者自身が望み、自ら表現するような変化をもたらすために、研究活動に携わるべきである (訳は筆者による)」と述べている。

本研究では、消滅の危機にある地域方言の記録・保存活動における高齢者との協働的実践が、世代間交流の機会創出および社会関係資本の醸成に寄与することが明らかになった。さらに、個人のアイデンティティと密接に結びついた「母方言について教える (=与える)」という行為が、福祉言語学の新たな実践として位置づけられる可能性を見出した。

[参考文献]

- Aked J., Marks N., Cordon C., Thompson S. (2008). *Five ways to wellbeing; communicating the evidence*. New Economics Foundation. London.
- Cochran, P. A. L., Marshall, C. A., Garcia-Downing, C., Kendall, E., Cook, D., McCubbin, L., & Gover, R. M. S. (2008). Indigenous Ways of Knowing: Implications for Participatory Research and Community. *American Journal of Public Health*, 98(1), 22–27.
- Fujiwara, Y., Nonaka, K., Kuraoka, M., Murayama, Y., Murayama, S., Nemoto, Y., Tanaka, M., Matsunaga, H., Fujita, K., Murayama, H., & Kobayashi, E. (2022). Influence of “Face-to-Face Contact” and “Non-Face-to-Face Contact” on the Subsequent Decline in Self-Rated Health and Mental Health Status of Young, Middle-

- Aged, and Older Japanese Adults: A Two-Year Prospective Study. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 19(4), Article 4.
- Moje, E. B. (2000). Changing our minds, changing our bodies: power as embodied in research relations. *Qualitative Studies in Education*, 13(1), 15–42.

④成果物

本研究について発表した論文、刊行物、シンポジウム等の情報を記載してください。
参照 URL がある場合はそれを含めてください。

[本研究について発表した論文]

- (1) 谷口ジョイ (2024) . 福祉言語学の再構想 社会言語学, 24, 1–10.
- (2) Taniguchi, J. (in print). The Linguistic Shift in a Language Island: Changes in the Community through Research and Language Revitalization Project. In: Hammine, M. and Rudolph, N. (Eds). *Transcending language education in Japan: Borderland accounts of being, becoming and belonging*. Bloomsbury.
- (3) 谷口ジョイ・山岸祐己 (2025) 「静岡・井川方言に見られる急速な言語シフト：世代間継承の断絶および活性化プロジェクト」シンポジウム「移動・境界・言語」論文集 2025.

[本研究についての口頭発表]

- (1) 静岡市北部・井川の民話『てしゃまんく』の紙芝居
国立国語研究所 第 19 回 NINJAL フォーラム「こどもたちが大人になったときにも、島のことばが聞こえる世界を残すために」 2025 年 3 月 16 日
- (2) 南アルプス井川における消滅危機方言の記録保存と継承
南アルプスユネスコエコパーク登録 10 周年記念シンポジウム 2025 年 3 月 9 日
- (3) Collaborative Revitalization Project Showcase: with five communities of Japonic languages
Masahiro Yamada, Sachiyo Fujita-Round, Madoka Hammine, Noriko Iwasaki, Tomoko Koh, Kayoko Shimoji-Kojima, Trevor Slevin, Joy Taniguchi, Akiko Yokoyama
The 9th International Conference on Language Documentation & Conservation 2025 年 3 月 8 日
- (4) (招待講演) 福祉言語学の新たな実践 一限界集落における方言調査を事例に―
第 49 回社会言語科学会研究大会 2025 年 3 月 1 日
- (5) 地域コミュニティと連携した危機方言の保存・継承―静岡・井川の事例から
八丈島と八丈小島の魅力発見講座―消滅危機言語八丈語の継承と保存― 2025 年 2 月 15 日
- (6) 言語継承の断絶は何を意味するのか
みんぱく創設 50 周年記念・特別研究国際シンポジウム「国家とエスニシティ：ポストナショナルリズム時代の関係」 2024 年 12 月 1 日
- (7) [SYMPOSIUM] Youth in translingual and transmissional practices in a rapidly aging society: The importance of 'space' and language: Creative Language Use Among New Speakers in a

“Language Island,” Ikawa

Joy, TANIGUCHI

Association Internationale de Linguistique Appliquée (AILA) 2024 2024 年 8 月 16 日

(8) Language Revitalization Workshop: Experience from Different Communities

Sachiyo Fujita-Round, Matthew Topping, Akiko Yokoyama, Joy Taniguchi, Jelisava Sethna

International Seminar "Decolonizing Futures: Transforming an Era of Environmental Catastrophe, Poverty, Hatred, Discrimination and Violence into an Era of Hope" 2024 年 7 月 14 日

(9) 限界集落の高齢者に開かれた新たな福祉の場ー危機方言の記録・保存活動を通して

第 32 回情報保障研究会 2024 年 3 月 30 日

(10) 「言語の島」における急速な言語シフトとその要因

シンポジウム「移動・境界・言語」／共同利用・共同研究課題「移民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究」2023 年度第 2 回研究会（通算第 8 回目）／第 34 回東京移民言語フォーラム 2024 年 2 月 25 日

(11) A "Language Island" in Japan: Variation and Change in an Endangered Dialect

International Seminar: Towards Decolonizing Futures - Languages, Culture, Art, and Nature Under and Against Settler Colonialism 2023 年 11 月 12 日

[シンポジウム・出張授業]

(1) シンポジウム「のこしたい 私たちのことば」

静岡理科大学 情報学部 サービス情報学研究室/応用言語学研究室 2024 年 10 月 5 日

(2) フィールド調査から見る静岡方言ー井川方言の変化と継承

静岡理科大学 静岡理科大学 令和 6 年度 第 2 回 公開講座 2024 年 11 月 23 日

(3) 「静岡市北部・井川方言」ブース部門・表現部門

文化庁 令和 6 年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（八丈島大会） 2024 年 12 月 7 日～9 日

(4) 出張授業：方言を研究すること

藤枝市立瀬戸谷小学校 総合学習

(5) 消滅危機にある静岡井川方言の再活性化

静岡県スポーツ・文化観光部政策管理局企画政策課 東アジア文化都市 2023 静岡県記念 ヒガナンフェスティバル 2023 年 11 月 23 日

(6) 出張授業：のこしたい井川のことば

静岡市立井川小中学校 環境教育 2023 年 10 月 12 日

⑤写真

研究実施中の様子、成果物等の写真を掲載してください。(各写真にキャプションを付けてください。)



制作した紙芝居「てしゃまんく」



紙芝居を子どもたちに読み聞かせる井川の方



「辞書を作る会」の様子



方言調査の様子